

アリユーシャは、心の中でコヌンに呼びかけた。

一方、渡されたナイフを見て、カナンはつぶやいた。

「俺の、ナイフだ……」

「そうよ。山のあちこちに捨てられたあなたの持ち物は、全部探し出しておいたわ。首飾りもナイフもなにもかも。カナン。このナイフで、あなたには一仕事してもらおうわ。でも、それはあと。まず、この女の子の持ち物を盗むのよ」

「……盗むのか？」

「そうよ。昔やったようにね」

卑しい笑いを浮かべながら、二人はゆっくりとアリユーシャの荷物のほうに近づいていった。

あいつらにあれを見つけれられてはならない。

とっさに思い、アリユーシャは声をあげた。

「お願い。そっちの小さな袋に入っているものなら、なんでもあげるから。その大きな袋には手をつけないで」

はっとしたようにネイヤは立ち止まり、すぐに耳障りな笑い声をあげた。

「そういえば、その小さな袋は私がおまえにやったものだったね。それでは盗むことにはならない。忠告をあげがとう、アリユーシャ」

そう言って、ネイヤたちは大きな袋を取り上げ、中身を地面にぶちまけた。アリユーシャは目をそむけた。自分の持ち物が汚れた指で漁られているのを見るのは、吐き気が

するほどつらかった。

ほどなくネイヤたちは立ち上がった。ネイヤは薬入れを、カナンはナイフを研ぐための石を取っていた。

「さて、これで盗みは終わった。次は何をすればいい？」

「あの時やったことをするのよ」

そう言って、ネイヤは意味ありげにアリユーシャを見や

った。

「思い出してね、カナン。最初は子どもの左肩を刺したのよ。心臓を刺したのはそのあとだった。私たちは、あの時にやった通りのことをしなくてはだめなのよ。ほんの少しだって、狂いがあつてはならないの」

「大丈夫だよ、ネイヤ」

恋人に微笑みかけ、カナンはアリユーシャに向かっていった。

アリユーシャの体から冷たい汗がふきだした。悪夢を見ている思いだった。コヌンが目を光らせながら、自分にナイフをふりかざしてくるなんて。

お願い！ 正気に戻って！ コヌンに戻って！

だが、アリユーシャがそう呼びかけるよりも早く、恐ろしい一突きがアリユーシャの左肩を襲った。

ナイフが刺さった瞬間、アリユーシャは息が止まった。まるで、体の中に霜を打ちこまれたかのようだ。どくどくと激しい耳鳴りが響いた。